

舞姫まひ（前半部）

森鷗外もりおугい

内容理解

この文章の前半部で作者は、主人公豊太郎の独白によって、その半生と留学先での変節を語らせ、豊太郎の人物像を作り上げている。本文を読み直しながら、空欄に入る適切な言葉を補ってみよう。

◆一点の翳かげ

セイゴンの港に泊まる船は、出港を前に石炭を積み終えた。洋行の望みをかなえ、往路この港に来た頃には、物珍しさにはしゃいだ自分が、帰路、日記のために用意した冊子も白紙のままである。全てはこの「人知らぬ」1のせいである。これを今、語らずにはいられない。

◆はるばると家を離れて伯林ベルリンの都に來ぬ。

父を早くに亡くしたけれども、幼少より首席を通して、十九の歳に学士、某省に出仕、官長の「2殊なりしかば」、洋行の命を受ける。名を挙げるのも、家を興すのも、今この時と勇み立ち、母と別れることを悲しいとも思わなかった。

・欧羅巴ヨーロッパの伯林、ウンテル・デン・リンデンに來て、見るもの全てに目を驚かしても、胸に「あだなる」3に心をば動かさじ」の誓いあつて、動揺することもない。

・普魯西プロシアの官員に歓迎され、独逸語ドイツ、仏蘭西語フランスを学んでいたことを喜ぶ。一月、二月が過ぎ、取り調べははかどり、公の許可も得てあつて、官事の暇に大学に学ぶ。幼くも思っていた、4になる特科などなく、法科の講義を受ける。

◆危ふきは余が当時の地位なりけり。

・三年が過ぎ、5な大学の風に当たったためなのか、二十五歳になって、これまでの自分が自分でないように思えてくる。父の遺言を守り、母の教えに従い、褒められるのがうれしくて学びに励み、官長の励ましに怠らず勤めた自分は、6的、器械的人

語句

この文章の中で使われていた次の言葉を使って、短文を作ってみよう。

功名（二六九・上7）

破竹（二七〇・下14）

有為（二七一・下7）

恍惚（二七六・下19）

物になってしまっていた。政治家や法律家には自分はふさわしくない。官長への返信も、どんな細かい問題にも丁寧⁷に答えていたのが、法の⁷をわきまえれば、細目にかかわる必要はないと広言する、大学では法科をよそに、歴史文学の面白みがわかるようになってきた。

・官長の不評だけでも自分の地位は危ういの、留学生の一勢力と不仲となる。実は、我が心は物触れば縮みて避け、耐忍勉強の力と見えたのも、人のたどらせた道をただ一筋にたどつたに過ぎない。あつぱれ⁸。と思つていた自分が、船が横浜を離れるや涙を止められなかったのは不思議ではなく、むしろそれこそ自分の本性であつたのだ。この

9 ふびんな心ゆえに交際できなかつたことが、嘲りを受け、妬まれ、猜疑され、「冤罪⁹を身に負ひて、¹⁰の間に無量の艱難^{かんなん}を閲^{けみ}し尽くす」その因となる。

◇彼は優れて美なり。ある日の夕暮れ クロステル巷^{かう}の古寺の門扉の前に涙する少女に出

会う。その青く清らで愁いを含んだ目に見つめられ、大胆にも声をかける。窮状を訴える少女をその家に送り、父の死、葬る貯えのないこと、「恥なき人」となることを強いる母を知り、そしてあらためて少女エリスの美しさに出会う。救いを乞われ、「余」は住居と名前を告げ、援助の代に時計を置いていく。

（後半へ）

主題

作品のこの前半部分で作者はどのようなことを描こうとしたと思われるか、次のことに着目して、百字程度でまとめてみよう。

〈着目点…豊太郎の本性〉

発展

次の中で興味を持った事項について、図書館の書籍やインターネットなどを使って調べてみよう。

・明治期の海外留学は、どのようなものだったか。

・この当時のベルリンは、どのような街か。

・維廉^{ウィルヘルム}一世とは、どのような人物か。

100

舞姫（後半部）

森 鷗外

内容理解

この文章の後半部で作者は、名誉を捨てられない豊太郎、健気なエリス、良友相沢が生んでしまった悲劇を描こうとしている。本文を読み直しながら、空欄に入る適切な言葉を補ってみよう。

◇ 免官。つひに離れ難き仲となりしはこの折なりき。 エリスはお礼に豊太郎を訪ねる。エリスとの交際は、同郷人に知られ、官長に告げる者あつて、免官、免職となる。即時帰国なら費用は公費で賄うと言われ、一週間の¹ を得るが、母実筆の手紙と母の死を告げる親族からの手紙を同時に受け取る。「我が一身の² 」、「危急存亡の秋^{とせう}」にあつて、「我が³ を哀れみ、⁴ を悲しみて伏し沈む」エリス、その美しくも、いぢらしき姿。「恍惚の間にここに及びしをいかにせん」。

◇ 相沢の助け。エリスの助け。 天方伯の秘書官相澤が、某新聞社の通信員となる職を斡旋し、エリスは二人の同居を母に説得し、「憂きが中にも楽しき月日」を送ることとなる。「我が学問は荒みぬ。されど余は別に一種の⁵ を長じき。」それは、独逸新聞の社説すら読めない同郷の留学生など、夢にも知らぬ境地であつたろう。

◇ エリス懷妊。相沢が「余に示したる前途の方針」。

・明治二十一年の冬、母は、エリスの悪阻^{つわり}に氣づく。相沢からの伯林消印の手紙が届く。天方大臣が会いたがつている。⁶ 回復のチャンスは今だ、との呼び出し。身支度を手伝つてくれるエリス、「たとひ富貴になりましたまふ日はありとも、我をば見捨てたまはじ。」と言われて「富貴」の語に微笑み、友に会いに行くのだ、と馬車に乗る。エリスは凍った窓を開け、朔風に髪を吹かせて余を見送った。

・快活な気象の相沢は、「余」の失行など意に介さない。大臣から翻訳の依頼を受け、相沢との昼食。「余」の「不幸なる閱歴」を聞いた相沢は驚き、「余」を責めもせず、「色を正

語句

この文章の中で使われていた次の言葉を使って、短文を作ってみよう。

汚名（二七七・上2）

思案（二七七・上11）

境地（二七九・上9）

円滑（二八三・下11）

して」いさめた。能力を示し「伯の⁷ を求めよ。」またエリスとの関係は、「たとひ彼に誠ありとも」「意を決して断て」と言われる。貧しくも楽しい今の生活、捨て難きエリスの愛。しばらく友に従いこの情縁を断つ、と約束した。

◇^{ロシヤ}魯西亜同行。我が軽率。

・伯より、魯西亜に行くがついてくるか、と問われ、命に従いますと即答した。頼む人に問われ、量りもせず承諾、耐えて行うことが自分にはしばしばあったのだ。

・翻訳の代を「常ならぬ身」のエリスに渡し、旅立つ。エリスは手紙で、私の愛であなたをつなぎ留めると、思う心の深きを伝える。ようやく自分の立場に気づいた。相沢の口ぶりでは、軽率にも口にした「関係を絶たん」の言を伯に伝えたい。

◇元旦、帰宅。錯乱、人事不省。エリス狂乱。

抱きしめた。大臣に呼ばれ、相沢からこの地に係累もないと聞く、共に帰国するかと問われ、この手にすがるなければ、「本国をも失ひ、名誉を引き返さん道をも絶ち、身はこの広漠たる欧州⁸ の人の海に葬られんか」と思う。承諾。エリスに語るすべを失い人事不省に陥る。気がつけば、相沢から顛末^{てんまつ}を聞いたエリスは廃人と化していた。

ああ、相沢謙吉がごとき⁹ を憎む心今日までも残れりけり。

 は世にまた得難かるべし。されど我が脳裡に¹⁰ の彼

主 題

この作品で作者はどのようなことを描こうとしたと思われるか、次のことに着目して、百字程度でまとめてみよう。
〈着目点…豊太郎の決断〉

発 展

次の中で興味を持った事項について、図書館の書籍やインターネットなどを使って調べてみよう。

・ベルリンの冬は、どのようなものであるのか。

・鷗外の留学体験は、どのようなものだったのか。

・鷗外は、どのような生涯を送ったのか。

100